

琉球大学学術リポジトリ

漢字圏の学生に対する漢語スル動詞の導入

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2013-06-21 キーワード (Ja): スル動調, 漢字語提, 母語の干渉, 他動性 キーワード (En): SURU-verb, KANJI compounds, interference of first language, transitivity 作成者: 石原, 嘉人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26514

漢字圏の学生に対する漢語スル動詞の導入

石原 嘉人

要 旨

漢字圏の学生が日本語の漢字語彙を使用する際に母語の干渉による誤用が頻繁に生じることはよく知られている。本稿では「〇〇スル」の形式をとる漢字語彙を対象に、中国語話者と韓国語話者に共通して見られる典型的な誤用を分析してその特徴を明らかにした。また、分析結果に基づいて381個の動詞を分類し、誤用を回避するための効率的な指導方法について考察した。

【キーワード】スル動詞, 漢字語彙, 母語の干渉, 他動性

0. はじめに

漢字圏の日本語学習者には、漢字語彙を使用する際に次のような誤用をおかしやすいという共通した特徴がみられる。

- 1)*センター試験の後、道路は混雑になった。 (正しくは、「道路は混雑した」)
- 2)*彼は山で道に迷い、孤立された。 (正しくは、「孤立した」)
- 3)*彼の考えを同意した。 (正しくは、「彼の考えに同意した」)

1)は品詞, 2)は動詞の自他, 3)は格助詞の選択について、いずれも母語の同形語を連想したために生じた誤認であると思われる。これらは漢字圏の日本語学習者に共通する典型的な誤用例であり、一定の指導を行うことで回避できる。

先行研究には、このような誤用が予見できることを早くから指摘したものが少なくない。例えば生越(1982)は韓国語においては主語が人間であれば《〇〇하다》¹⁾を、人間でないときには《〇〇되다》を、それぞれ使用する傾向があると言い、「〇〇する」の主語が人間ではない場合に誤用が起りやすいことを指摘している。同様に、石・王(1983)も自動詞、他動詞、使役、受身などで誤用が生じやすいことを指摘している。先行研究にはほかにも柴(1986)、大河内(1997)、若生(2008)、吉田(2011)など数多くあるが、石原(2012)でも述べたとおり、このような先行研究の成果が日本語教育の現場に生かされているとは言いがたい。

本稿は 1)～3)で挙げたそれぞれの問題点について、韓国語話者と中国語話者が混在する授業での指導経験に基づき、実践的な指導方法を提案するものである。具体的には、「〇〇する」という形式を持つ漢字語彙を学習者が理解しやすいように分類し、典型例を示した上でそれぞれのカテゴリーに分類される動詞の実例を示すという方法である。つまり、漢字語彙が「〇〇する」という形式を持つかどうかを明示し、その動詞がどのような構文に用いられるのかという情報も同時に与えることによって誤用を回避するというわけである。

1. 品詞について

まず、品詞の誤認について整理する。石原(2012)でも指摘したように「漢字語彙の意味がほぼ同じであるのに品詞が異なっている」というケースは、日本語と中国語の間にも日本語と韓国語の間にも数多くみられる。

例えば、日本語では「犠牲」は名詞であり「犠牲する」という形式をとらないのに対して、韓国語では《희생(犠牲)하다》という形式を持ち、4)のような文が成立する。つまり、《희생(犠牲)》は動詞語幹としても認識されているのである。中国語も同様であり、5)のように同形語《牺牲(犠牲)》が動詞として使われることが珍しくない。4)5)を直訳すると、いずれも「多くの若者を犠牲した」となる。

4) 많은 젊은이를 희생했다.

5) 牺牲了 許多年青人。

同様に、日本語の「損害」は「損害を与える」のように名詞として用いられることが一般的である 3) のに対して、韓国語では《손해(損害)하다》という形式で用いられることが多く 6)のような文が成立する。つまり、《손해(損害)》は動詞語幹としても認識されているのである。中国語でも 7)のように同形語《损害》が動詞として使われることが珍しくない。6)7)を直訳すると、いずれも「不買運動が企業の利益を損害した」となる。

6) 불매운동이 기업의이익을 손해했다.

7) 不买运动 损害了 企业利益。

「犠牲」や「損害」は漢字の組み合わせだけでなく語義も日本語の同形語とほぼ同じであるため母語の干渉が生じやすく、8)9)が不自然であることを自覚しない学習者が多い。

8)*この戦争で多くの人が犠牲された。（正しくは、犠牲になった）」

9)*この法案は金持ちの利益を損害した。（正しくは、富裕層に損害を与えた）」

逆に、日本語で「〇〇する」という形式をとる漢字語彙を形容詞などと誤認するケースもよく見られる。

10)*彼は熟練な腕前を發揮した。（正しくは、熟練した腕前）」

11)*このバスは混雑だ。（正しくは、混雑している）」

上記のような同形語の誤用を回避するためには、母語との違いを意識化させることが肝要である。さしあたって必要なのは、日本語で「〇〇する」という形式をとる漢字語彙を動詞として提示し、認識させることだろう。本稿は「〇〇する」という形式を持ち動詞として使用される381個の語彙のリストを5節に提示するが、それに先立ってそのリストを有効に活用するための枠組みについて考察を試みる。第一の問題は、動詞の自他の区別である。

なお、本稿では、日本語で「〇〇する」という形式をとるもののみを扱い、「〇〇をする」「〇〇になる」などの形式でしか述語にならない例は考察の対象としない³⁾。

2. 動詞の自他と形式

前節では漢字語彙の品詞に関する誤認について述べたが、動詞であることが正しく認識できた場合でも、漢字語彙「〇〇する」という形式の場合は自動詞と他動詞を誤認して、12)~16)のような文を作ってしまうことがしばしばある。

12) *このプロジェクトを通してアフリカにパソコンを普及しています。

13) *その組織は瓦解された。

14) *細胞が分裂された。

15) *その国の政権は反対派によって分裂された。

16) *学生は先生に影響させられる。

12)は「普及する」を他動詞と認識した結果の誤用である。「普及する」は自動詞であるから「普及させて」のようにしなければならない。13)は「瓦解する」を他動詞に、14)は「分裂する」を自動詞に、それぞれ誤認した結果である。15)は「*反対派が政権(与党)を分裂した」という文を受身形にしたものと推察できるが、「分裂する」は自動詞なので「分裂させられた」と記述するのが正しい。16)は「*先生は学生に影響する」という文を受身形にしたものであるが、この場合は「学生は先生に影響される」と記述するのが正しい。

12)～16)の例については文を書いた学生本人に表現意図を確認したが、いずれも動詞の自他の区別について正しく認識できていなかった。必ずしも母語の品詞を意識した上で使用したとは断定できないが、「〇〇する」という形式が自動詞であるか他動詞であるかについて自覚的でなかったことが誤用を招いたと推定できる。つまり、自動詞と他動詞の選択において、中国語話者にも韓国語話者にも共通する間違いが多く見られるのは、動詞の自他について厳密に分類せず、意味が近いかどうかだけで同形同義語と認知してしまうことが原因であると考えられるのである。

このような例は日本語教育の担当者にとって見慣れたものであるが、同様のケースを一括して指導する機会が少ないために、体系的に説明されることなくその場限りの修正にとどまることが多いのではないだろうか。

問題点を整理しよう。日本語において、「自動詞／他動詞」と「される／する／させる」の対応関係は以下のとおりであり、形式を見ただけでは自動詞か他動詞かを判断できない。

自動詞	携帯電話が <u>普及する</u>	計画が変更される
他動詞	携帯電話を普及させる	計画を <u>変更する</u>

このことから、日本語のスル動詞の自他の使い分けについてはあらかじめ分類したものを提示するのが効果的であると思われる。つまり、「〇〇する」という形式が自動詞になるグループと、「〇〇する」という形式が他動詞になるグループを、それぞれリストアップして覚えさせるのである。

3. 自動詞と他動詞

ここでは、日本語の動詞を、①自動詞のみ、②自動詞と他動詞のペア、③他動詞のみ、の三つのカテゴリーに分けて考察する。

3-1. 使役形と他動詞

石原(1993)で指摘した通り、①が用いられる文では他動詞の欠落を補完するために、その使役形を他動詞相当句として使用することがある。

17) 明日はこの低気圧がまとまった雨を降らせるでしょう。

18) 少年たちは目を輝かせながら一心不乱にボールを追っていた。

このような場合、形式上は使役形であっても使役文ではなく、他動詞文に相当するものと位置づけるのが妥当である。それと同様に、次の例では自動詞「〇〇スル」のペアの他動詞として「〇〇サセル」を位置づけることができる。

19) a 祖父の病状が悪化している。

b 祖母の不在が祖父の病状を悪化させている。

20) a その手紙を読んで、皆が安心した。

b その手紙は皆を安心させた。

21) a 新政権が誕生して、通貨が安定した。

b 新政権の誕生が通貨を安定させた。

つまり、「〇〇スル」が自動詞の場合、「〇〇スル」と「〇〇サセル」の間には、以下のような関係が成り立つのである。

	孤立	分裂	普及	発展	変化	収束	発足
自動詞	孤立する	分裂する	普及する	発展する	変化する	収束する	発足する
他動詞	孤立させる	分裂させる	普及させる	発展させる	変化させる	収束させる	発足させる

表1 自動詞とそれに対応する他動詞の例

このことから、「〇〇サセル」という形式の動詞が他動詞に相当する場合があることがわかる。22)～24)のような文が作られる背景には、「させる」という形式をすべて使役と認識している学習者の存在が想定されるのである。

- 22) *祖父の病状を悪化している。
- 23) *その手紙を読んで、皆を安心した。
- 24) *新政権が誕生して、通貨を安定した。

3-2. 受身形と自動詞

一方、③の動詞においては、自動詞の欠落を補完するため受身形が用いられることがある。以下の例を見てみよう。

- 25) 三月だというのに、まだ玄関に注連飾りが飾られている。
- 26) 日本は海に囲まれている。
- 27) 「守礼之邦」という扁額が掲げられている。
- 28) ベランダに大量の洗濯物が干されている。

これらは、いずれも「(他動詞) +てある」という表現のペアとして使われている。それと同様に、次のような他動詞「〇〇スル」では「〇〇サレル」がペアの自動詞として位置づけられる。

- 29) 野鳥からウィルスが検出された。
- 30) 太陽光発電は、コスト面でずいぶん改善された。
- 31) サンフランシスコ条約が締結され、沖縄は米軍の支配を受けることになった。

	締結	計画	発揮	展示	左右	開催	促進
自動詞	締結される	計画される	発揮される	展示される	左右される	開催される	促進される
他動詞	締結する	計画する	発揮する	展示する	左右する	開催する	促進する

表2 他動詞とそれに対応する自動詞の例

ただし、すべての動詞が「〇〇させる」または「〇〇される」の形式を持つわけではない。あくまでも、意味的な対応が存在している場合に、形式上の欠落を補うものとして「〇〇させる」または「〇〇される」の形式が用いられるのである。

32) 新しい空港は市街地の西に位置している。

?新しい空港を市街地の西に位置させている。

33) 現場の状況を一見する。

?現場の状況が一見される。

34) この会社は創業者の一族によって経営されている。

35) ガンジーが暗殺されて、インドは分裂の危機を迎えた。

32)33) のようなケースは他動詞や自動詞で対応する文を想定することが難しいし、34)35) は自動詞ではなく受身と解釈すべきケースである。

3-3. 自動詞と他動詞が同形語の例

益岡・田窪(1992)が指摘するように、日本語には同じ形式で自動詞としても他動詞としても使える動詞が、数は少ないが存在する。

36) a 心の扉を開いて、何でも受け入れてみよう。

b 突然ドアが開いて、知らない男が入ってきた。

37) a テキストの第一課を終わって、ようやく緊張がほぐれた。

b テキストの第一課が終わったので、明日は第二課に入る。

漢字語彙の「〇〇スル」という動詞には、同様のケースが比較的多く存在する。漢字語彙と同様に、外来語の場合にも自他同形のケースが散見される。漢字語彙の「〇〇スル」について自他同形の例が少なくないことは注目に値する。

38) a 工場が移転した。

b その会社は工場を移転した。

39) a 震災復興イベントをきっかけに二人の交際がスタートした。

b この二人は震災復興イベントをきっかけに交際をスタートした。

- 40) a 紆余曲折の末, IMF 総会の日程が決定した。
b IMF 総会の日程を決定するまで, 水面下で紆余曲折があった。
- 41) a 中国からのレアメタルの輸入がストップした。
b 中国政府はレアメタルの輸出をストップした。

漢字語彙の「〇〇スル」が自他同形となるものには, ほかに「移動」, 「解決」, 「一変」, 「解消」, 「伝播」, 「両立」などがある 4)。

- 42) a 車が移動した。
b 車を移動した。
c 車を移動させた。
- 43) a 委員会の努力によってこの問題が解決した。
b 委員会はこの問題を解決した。
c 委員会はこの問題を解決させた。

42)43)を見ればわかるように, これらは「～ガ〇〇スル」「～ヲ〇〇スル」「～ヲ〇〇サセル」という形式を持っているため, 自動詞か他動詞かを截然と示すことができない例であり, 特殊なグループとして提示する必要がある。

4. 助詞「を」「に」「と」

自動詞と他動詞の区別がついている場合でも, 44)45)のように助詞の選択を誤ることが珍しくない。

- 44)*テロリズムを抗議する。 (正しくは, 「テロリズムに抗議する」)
45)*彼の考えを同意した。 (正しくは, 「彼の考えに同意した」)

つまり, 他動詞であることを意識することによって, 助詞「を」を選択するという結果が導きだされる傾向が見られるのである。その背景には, 46)～48)のような対応関係が存在するものと思われる 5)。

- 46) a 友だちに会う

- b 친구를 만나다 (直訳：友達を会う)
c 遇见 朋友 (直訳：友達を会う)
- 47) a 自転車に乗る
b 자전거를 탄다 (直訳：自転車を乗る)
c 乘坐 自行车 (直訳：自転車を乗る)
- 48) a 南に向かう
b 남쪽을 향한다 (直訳：南を向かう)
c 去 南 (直訳：南を向かう)

これらの例を見ると、述語と結びつく名詞をマークする形式を使い分ける基準が、日本語と韓国語・中国語の間で一致していないことがわかる。日本語であれば49)のように他動性が強い場合に限って典型的な目的語を示す「を」が用いられるが、韓国語や中国語においては他動性がさほど強くない文においても典型的な他動詞と同じ形式が使用されているのである⁶⁾。

- 49) a 自転車を乗りまわす
b 자전거를 몰고 돌아다닌다 (直訳：自転車を乗りまわす)
c 兜风 自行车 (直訳：自転車を乗りまわす)

他動性の強さというのは、対象に対する関与の度合いを示すものである。たとえば「展示品を壊す」のように対象が変化を被るような動詞は他動性が高く、「展示品に触れる」のように対象への影響が小さい動詞は他動性が低いと考えられる⁷⁾。

47)と49)の例に即して言えば、「乗る」は二人乗りの後部に座っている場合でも使用できるが、「乗り回す」のほうは動作主が自分で操作することを明示しており対象を制御する感覚が強く働いている。要するに、動作主からの積極的な関与が示されていれば他動性が強いというわけである。このことから、他動性の強い述語に限って「を」を用いる日本語と比べると、韓国語・中国語では典型的な他動詞の形式を用いる範囲が広いことが窺がえるのである。

漢字語彙に限らず、一部の外来語についても同じことが言える。

- 50) *片思いの女性をアタックする。 (正しくは、「片思いの女性にアタックする」)

50)はアタックの語源である「attack（攻撃する）」の意味であれば正しい文となるが、日本語では通常「好意を告白する」という意味でこの動詞を用いるため、他動性の低い形式「～に」という指標が選択されるのである。

以上の議論から、日本語では動作主以外に必須補語をとる動詞において、その必須補語を「を」以外の指標でマークすることが多いのに対して、中国語や韓国語では「を」に相当する指標がより広範に使用されることがわかった。

小論では、この違いに誘発される誤用を少なくするために、「自動詞／他動詞」の代わりに「一項動詞」「二項動詞」「三項動詞」という枠組みを導入することを提案したい。「一項動詞」というのは、行く、死ぬ、など必須補語が一つだけの動詞であり、「二項動詞」は、食べる、会う、教わる、預かる、など必須補語が二つの動詞、「三項動詞」は、伝える、与える、教える、預ける、など必須補語が三つの動詞である⁸⁾。

「自動詞／他動詞」という枠組みが日本語・韓国語・中国語で一致していない以上、漠然とした定義づけのまま「他動詞」という分類で扱うよりも、動詞と事態の成立に必要な成分との関係を示す「項」によって分類すれば、個別言語を超えた共通した枠組みを示すことができる。そうやって共通の枠組みを作った上で、典型的な他動詞を含む二項動詞について重点的に解説すれば、母語の干渉を防ぎやすくなる。

たとえば、「賛成する」「応募する」などの動詞を「他動詞」という大雑把な認識で把握している限り、助詞「を」を選択する可能性が高くなることは避けられない。しかし、二項動詞という枠組みを与えた上で、ガ格以外の項をマークする助詞について、「(コンビニに)寄る」「(人と)別れる」「(人に)会う」などの例を挙げつつ、述語の意味との相関関係を示せば、格助詞に関する多くの誤用が回避できるのである。

5. まとめ

これまでの考察に従って、『天声人語』6か月分のデータ⁹⁾から381個のスル動詞を抜き出し、分類した。その結果は以下の通りである。

- A: 「〇〇スル」という形式が自動詞と考えられるもの(一項動詞) : 123 個
- B: 「〇〇スル」という形式でヲ格を取る他動詞のもの(典型的な二項動詞) : 191 個
- C: 「〇〇スル」という形式が自動詞にもヲ格他動詞にも使用できるもの¹⁰⁾ : 17 個
- D: ヲ格ではなく、ニ格の補語を取るもの(二項動詞「寄る」の類) : 29 個

E: ト格の補語を取るもの(二項動詞「別れる」の類) : 12 個

F: ト格の補語または二格の補語も取るもの(二項動詞「会う」の類) : 7 個

G: ヲ格の補語も二格補語も取るもの(三項動詞) : 2 個

それぞれのグループごとに 50 音順に並べると、以下のようになる。ただし、同形語であっても異なる意味で使用される場合、別の語として認定している。例えば、「注意する」は「無作法を注意する」のように警告の意味で使用する場合はBに分類してあるが、「車に注意する」のように警戒の意味で使用する場合はDに分類してある。

A: 「〇〇する」が一項動詞(自動詞)の例

圧勝、安眠、一変、一闪、引退、右往左往、会見、開幕、壊滅、回遊、瓦解、拡散、活躍、完結、完成、完投、乾杯、帰宅、喫煙、急増、恐縮、驚嘆、空転、苦学、苦悶、群舞、形骸化、激減、激怒、結束、航海、向上、更生、好転、高騰、行動、荒廃、降臨、混乱、作歌、殺到、参上、参戦、産卵、散乱、参列、仕事、自死、死傷、失脚、死亡、辞任、自立、従軍、充実、収束、出勤、出馬表明、蒸発、消耗、出演、出沒、渋滞、進歩、水没、生還、精勤、成功、成長、絶滅、全壊、増殖、早世、想定、存在、台頭、他界、多発、誕生、重宝、沈黙、脱力、泥酔、転居、転落、倒壊、登場、得心、納得、難渋、南流、入選、爆死、爆笑、爆発、破綻、繁栄、半減、判明、被災、飛散、被爆、避難、疲弊、復員、武装、不足、浮上、フル回転、噴火、変転、変貌、崩壊、暴走、北上、密集、明滅、油断、来日、落胆、落命、林立、流布

B: 「〇〇する」が典型的な他動詞(ヲ格を取る二項動詞)の例

愛誦、圧倒、意識、意図、意味、上方修正、演出、遠隔操作、押収、汚染、解釈、解除、解説、回想、改装、改題、解凍、確認、確保、加工、加減、活写、我慢、刊行、甘受、鑑賞、観測、間伐、記憶、擬人化、起訴、期待、寄付、記念、糾弾、救出、強調、共有、記録、吟味、敬遠、経験、掲載、計算、撃墜、研究、検出、検討、公開、交換、厚遇、攻撃、更新、構成、公表、刻字、告発、再開、採取、採掘、採択、削除、撮影、殺処分、左右、自戒、自覚、支給、自己申告、持参、支持、指示、自称、実感、指摘、指導、自負、自慢、襲撃、充填、主宰、取材、出荷、受諾、主張、主導、出版、首謀、紹介、証言、称赞、消尽、承知、象徴、消費、証明、触発、処分、心配、正視、推定、制限、整理、説明、宣告、宣誓、選択、全廃、創案、増員、想像、想定、速報、体験、退治、代表、注意、頂戴、調節、調理、痛感、提供、提案、定義、徹底、展開、動員、投函、投稿、討議、導入、登録、特定、突破、吐露、認識、拝借、輩出、培養、破壊、白眼視、発散、発信、抜粋、発動、発

<p>売、発表、発明、反芻、反省、判断、販売、筆写、否定、批判、評価、表現、表明、封印、風靡、復元、変換、勉強、返上、返納、報告、放出、放置、放逐、補修、翻弄、密封、無視、命名、模索、用意、擁護、要請、予感、予言、予測、予想、予定、落札、乱獲、理解、力説、類推、冷遇、連発、朗読</p>
<p>C: 「〇〇する」の形式のまま、一項動詞としても、ヲ格を取る二項動詞としても、使用できる例 遠慮、解決、開業、加速、逆転、完了、再生、散見、実現、成就、心配、増幅、停止、復活、彷彿、拝察、優先</p>
<p>D: 「〇〇する」が二格を取る二項動詞の例 依存、一喜一憂、応戦、感心、寄港、帰着、寄与、君臨、献花、合格、呼応、賛成、参列、質問、失敗、説教、全面協力、注意、対応、対処、着手、同伴、反対、反応、反論、匹敵、復讐、由来、連座</p>
<p>E: 「〇〇する」がト格を取る二項動詞の例 結婚、格闘、合議、合併、共生、共存共栄、絶縁、対決、対峙、対談、文通、離婚</p>
<p>F: 「〇〇する」が二格またはト格を取る二項動詞の例 共鳴、協力、決別、再会、対面、電話、面談</p>
<p>G: 「〇〇する」が三項動詞(ガ格、二格、ヲ格)の使用例 感謝、謝罪</p>

表3 動詞の特性による分類結果

このようにして助詞を指標にしてカテゴリー別に提示し、助詞の選択が動詞の意味と対応していることを示せば、助詞の使い分けが理解しやすくなる。それと同時に、品詞の混乱や自動詞と他動詞の区別、助詞の選択についても、あらかじめ誤用を回避することが可能となるのである。

註

- (1) 本稿では日本語以外の語彙を示す際に《 》を使用する。漢字語彙に後続し動詞であることを示す《하다》と《되다》のうち、《하다》は「する」と翻訳されることが多く、《되다》は「なる」と翻訳されることが多い。
- (2) 辞書などには「吾人の安全幸福を損害するは必然なり」のようなスル動詞としての用例が記載されることもあるが、現代日本語としての「損害する」の使用頻度は韓国語や中国語と比べて極めて少ない。

(3) ただし，以下のような実例があることを鑑みると，漢字語彙「〇〇する」を使用する際の規範については明確な線を引くことが難しいと言わざるを得ない。

・行ってみると，境内は雑踏していて，縁日のようににぎやかだった。（関 p. 235）

・境内を結界しているのは，回廊である。（関 p. 235）

(4) 以下のような実例を見ると，「復活する」と「安定する」も自他同形のカテゴリーに入ると考えられる。

・例えばヘブライ語を復活した時に，ヘブライ文字なんて世界のどこでも使っていないわけですよ。（決断 p. 170）

・つまり多様性を保持することが，地球という生物無生物を含めた系を安定するために必要だということです。（決断 p. 171）

ただし，このような用法には違和感を覚える人がいるかもしれない。

(5) 韓国語の助詞「을/를」は日本語の「を」に該当する。ただし，「을/를」を用いない文も成立するという。具体的には，以下の通り。

46)は《친구와 만나다》とも言える。（《와》は「と」に該当する）

47)は《자전거에 탄다》とも言える。（《에》は「に」に該当する）

48)は《남쪽에 향한다》とも言える。（《에》は「に」に該当する）

(6) 油谷(2005)はこのような例について「対応する日本語が自動詞であるものが，他動詞として用いられる場合が多い」と述べている(p. 123)。

(7) たとえば，ヤコブセン(1989)では他動原型の特徴として

(a) 関与している事物(人物)が二つある。すなわち，動作主(agent)と対象物(object)である。

(b) 動作主に意図性がある。

(c) 対象物は変化を被る

(d) 変化は現実の時間において生じる。

の四つを挙げている(p. 239)。このことから，「壊す」のように全ての特徴を有する動詞は他動性の高い動詞でありヲ格をとるが，「含む」「似る」等のように一部の要件を欠く動詞は他動性が低い動詞でありヲ格を取らないということがわかる。

(8) 「一項動詞」「二項動詞」「三項動詞」という枠組みについて，たとえば益岡(1987)は以下の例を挙げている(p. 89)。

a. 雨だ。(0項動詞)

b. 太郎が倒れた。(1項動詞)

c. 次郎と春子が結婚した。(2項動詞)

d. 三郎が四郎に夏子を紹介した。(3項動詞)

(9) 朝日新聞論説委員室『天声人語 2011年1月-6月』朝日新聞出版から抜き出した。

(10) 3-3 で示した例がこのカテゴリーに該当する。たとえば、「どうぞ、遠慮しないで飲んでください」であれば一項動詞と見なされるし、「年頭の挨拶を遠慮した」であれば二項動詞と見なされる。

用例出典

(閩) : 司馬遼太郎『街道を行く 25 中国・閩のみち』 朝日文庫

(決断) : 鈴木孝夫ほか『漢字民族の決断』 大修館書店

参考文献

石原嘉人(1993)「他動詞と使役に関する一考察——中級学習者を対象として——」

『日本語・日本文化 第19号』大阪外国語大学留学生日本語教育センター 1-15

石原嘉人(2012)「漢字圏の学生にとっての漢字語彙習得」『留学生教育 第9号』

琉球大学留学生センター 35-53

ウエスリー・M・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』
くろしお出版

大河内康憲(1997)「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』
くろしお出版

生越直樹(1982)「日本語漢語動詞における能動と受動——朝鮮語 hata 動詞との対照——」
日本語教育 48号 日本語教育学会 53-65

柴公也(1986)「漢語動詞の態をいかに教えるか——韓国人学生に対して——」

『日本語教育』59号 日本語教育学会 144-156

石壁・王建康(1983)「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究別冊』
日本語と中国語対照研究会 昭和58年度科学研究費補助金(総合研究A) 研究成果報告書

益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

田谷幸利(2005)『日韓対照言語学入門』白帝社

吉田雅子(2011)「漢語サ変動詞の日中対比」『専修大学外国語教育論集』第39号 専修大学 39-56

若生正和(2008)「日本語と韓国語の漢字表記語の対照研究——漢語動名詞を中心に——」

『大阪教育大学紀要』第I部門第56巻第2号 大阪教育大学 69-83

(琉球大学留学生センター)

How to introduce the Acquisition of SURU-verb KANJI Compounds for Chinese and Korean Speakers

ISHIHARA, Yoshihito

Keywords: SURU-verb, KANJI compounds, interference of first language, transitivity

Abstract

This paper suggests an effective introduction of SURU-verb which is composed of KANJI compounds for Chinese and Korean speakers.

It is common knowledge that both Japanese and those languages mentioned have the same compounds. Even if the meaning of those compounds are almost the same, students of Chinese and Korean speech often cause mistakes; Such as confusion of word class, transitive or intransitive, and the choice of particles "wo","ni","to" and so on.

The aim of this paper is to analyze the cause of confusion and argue the features of these mistakes, as well as making the list of 384 verbs depending on the result of the analysis. It suggests to be an effective introduction to avoid typical error that comes from grammatical differences between the Japanese language and the Chinese or Korean languages.

(University of the Ryukyus)